

特集

昭和20年8月15日、長かった戦争は終わったあちこちから日本兵やその家族が引き揚げてきたが、中国には多くの子供たちが残されていた。その数5000人とも10000人ともいう。

中国残留孤児

長野県・飯田市に住む山本慈照さん、77才。山本さんの日課は中国から来た手紙の整理と返事の執筆だ。今年だけでも1600通来た。昭和47年、日中国交が回復、時の周恩来首相の『日本人は日本に返す』から中国残留孤児の身元調査がはじまった。厚生省には、これまで787件の身元調査依頼が来ており、326件が判明、残り461件がまだ不明のまま調査中である。

昭和47年、東京に住む姉とハルビンに住む妹が26年ぶり、はじめて電話で交信した。が姉の耳にはいるのは、日本語でなく流暢な中国語をあやつる妹だった。戦後34年、やっと祖国に帰った孤児と、その家族。何もわからない日本で学ぶ子供、はまるで過去の父の姿を見るようだ。劉守臣さん、こと、原日出夫さん一家。奥さんは「主人が日本人であるとは知りませんでした。今回、日本に帰ると言うのでやっとわかりました。別れようかとも思いましたが、子供もいるし、と思って日本に来ました。しかし日本語はわからないし、住む家もないし、とても心配です」

中国人として育った孤児にとって言葉の壁は厚い。38年ぶり里帰りしたある女性は、自殺。関係者に大きな衝撃を与えた。8月のある暑い日、新潟県から4人づれの客が山本さんを訪れた。中国に残された娘と二人の孫を探してくれというのだ。「一刻も早く」と年老いたおばあちゃんの焦りはつものる。

山本さんの所に里帰りしていた三人は中国に帰り、原さん一家は東京で生活することになった。山本さんは小さな送別の宴を開いた。酒を飲まない山本さんが、この日めづらしく飲み、そして少し乱れた。孤児たちの身元調査にたづさわるようになって、御仏の前につく機会もめっきり少なくなった。「戦争はいまだ終らない。戦争はいまだ終らない。」山本さんのつぶやきが、まるで読経のように続く。